



亀山市名誉市民

彫刻家
中村 晋也
Shinya Nakamura

作品紹介

ふるさとあい
Vol. 118

「ウルスラ伝(乙女たちの殉教)」

平成5(1993)年

ウルスラと11,000人の乙女たちに恐ろしい運命が待ち受けていました。ローマ巡礼の帰路、通りかかったケルンの町でフン族に襲われて皆殉死してしまいます。一人残ったウルスラのあまりの美しさに、フン族の将軍は「自分と結婚するなら命を救う」と言います。しかし、ウルスラはこれをきっぱり拒否したため、矢で射抜かれて殉死します。

敬虔なキリスト教徒であったウルスラは、多くの乙女たちを信仰に導いたことと、命を賭して信念を貫いたことで、聖女と言われるようになり、13世紀以降、若い娘の守護神として崇拜されるようになりました。ここでは悲劇に襲われる乙女たちの群像が大きな波のような塊として表現されています。



(高さ)334cm × (幅)226cm × (奥行)34cm
東京都愛国学園

特別協力 公益財団法人 中村晋也美術館

<https://www.ne.jp/asahi/musee/nakamura/>



まちかど
キラリ

木田 康仁さん
(みずほ台)



平成13年生まれ。愛知県立芸術大学大学院に在籍。令和5年、第18回亀山市美術展で市長賞受賞。同年、第78回春の院展、再興第108回院展に初入選し、以後連続入選。日本美術院展覧会(院展)で、優れた作品を発表する作家として「院友」を取得。グループ展にも随時参加し作品を出品。

頭の中に浮かぶ色彩世界を時(Toki)として描く

「LEGO®(レゴ)でゲームキャラクターを作ったり、ぬり絵の線画を描き写して色を変えて何度も楽しんだ経験が創作の原点になりました」と幼い頃を振り返る木田さん。中学時代は、サッカー部に所属し、美術の授業以外では絵を描かなかったと言います。高校進学を考える時期に先生から美術系の学校を勧められ、応用デザイン科のある高校へ進学。入学当初は、同級生の高いデッサン力や専門的な会話に圧倒されましたが、描き続けるうちに独自の色彩表現に魅せられ、2年生で日本画コースを選択。さらに学びを深めるため、名古屋芸術大学へ進みます。大学2年の秋、岡田真治さん(現・愛知県立芸術大学教授)の個展で本人と出会ったことが転機に。その後、交流を経て令和5年9月、日本美術院による国内最高峰の日本画専門公募展「再興第108回院展」で初出品した「時(Toki)」が初入選を果たしました。



「再興第110回院展」にて作品解説をする木田さん(左)と文化勲章受賞者の田淵俊夫さん(右)

木田さんが描くのは、頭の中に広がる空想の景色。「存在しない場所に『時』というテーマを重ね、止まった時間と動く時間を描き分けることに面白さを感じています」と話します。1作品に約1カ月をかけ、絵を描く際、どんな絵にするか迷わないよう下図を丁寧に描き込む木田さん。「人の心を動かす画を描くのは難しく、不安もあります。でも、支えてくれる人がいるから投げ出せない」と語ります。

今月からは、大学院で法隆寺壁画の模写など文化財保存にも挑戦し、古典と現代を重ねた新たな表現を目指して歩みを進めます。若い志は、これからさらに広がっていきます。

